プロタゴラス伝註解
—古代哲学資料研究序説—

納富信留

1、資料研究への方法論

古代ギリシア哲学者の著作は多くが失われ、思想検討にあたって解釈者は様々な問題に直面する。日本では主要哲学者の現存著作に加えて、西欧で編集された「断片集」も翻訳されているが(初期哲学ではディールス・クランツ編『ソクラテス以前哲学者断片集』(DK) 岩波書店、ヘレニズム哲学ではフォン・アルニム編『初期ストア派断片集』京都大学学術出版会)、それに基づく研究には方法論的な反省が必要となる。本論文は、ディオゲネス・ラエルティオス (DL)『哲学者列伝』「プロタゴラス伝」の分析を通じて、古代哲学の資料研究への方法論を探る試みである。

資料に関してまず念頭に置くべきは、古代では「書物」の公刊・流布の状況が不確実で、哲学において「書物」が果たした役割も近現代とは大きく異なる点である。原著作と言うべき書物が哲学者本人の手で出版されたか否かは確かではなく、公刊時や後世、編集・標題に他人の手が入っている可能性も高い。また、ソクラテスやピュロンやアルケラオスのように、そもそも著作を残さず弟子の証言に依存する哲学者は例外とは言えず、著作が哲学活動において直接的な役割を果たすのはローマ期に「註釈」commentary が成立して以降の事である(最新の資料概論は、J. Mejer の *A Companion to Ancient Philosophy*, Blackwell, 2006 所収論文参照)。

前 6 世紀以来、哲学者たちが思索を書き物に著しそれが流布し読まれたのは確かであるが、時代の流れと共に多くが散逸し、著作からの引用や言及、或いは標題だけが後世の人々の別の著作に記され伝承されてきた。引用や紹介の意図は様々で、賛同・批判いずれの場合でも解釈の意図が元の言説を歪める点には注意が必要である(キリスト教理論家による異教徒論駁が典型)。また、過去の哲学説を主題ごとに整理する「学説誌」doxography、哲学者の系譜を師弟関係で整理する「学統誌」successions、虚実相交ぜの逸話による「伝記」biography がジャンルとして流布しており、DL のようにそれらを混合する著述もあった。

更に、古い時代の思想を伝える著作自体が古代後期やビザンティン時代に書かれ、写本として中世から近世に伝承されてきた。その校訂には文献学によるテキスト批判が必須となる(一部、パピルスや碑文資料もある)。

19 世紀以降、古代哲学者について散見される引用や証言が学問的に収集整理され「断片集」に編集されている。引用元から切り離され、原著作の一部と認定された言葉が「断片」fragments と呼ばれているが、その性格は様々であり、取り扱いには細心の注意が要求される。とりわけ、DK のように基本資料集が権威をもって長年独立に用いられる時 (1903 年初版; 1952 年 6 版)、収められた「断片」は自明視され、それが孕む多くの問題は看過されがちである。まず、断片集では原著作の言葉の復元が目指され、後世の著作はその資料としてのみ扱われ、それ自体の価値や

特性や文脈が無視される。それらは互いに照合され、適宜校訂が加えられて「断片」が加工されている。また、広範で多様な原典からの「断片」取捨選択は、既に編集上の決断や処理を経ており (H. Diels, *Doxographi Graeci*, 1879 への J. Mansfeld & D. T. Runia, *Aëtiana I*, 1997 の批判的研究参照)、創作逸話や重複する証言は史料的価値が低いとして排除される事が多い。また、引用部前後の文脈がより重要な意義を担う事も少なくないが、断片集にはほとんど含まれない。そもそも古代の著述家には直接引用とパラフレイズの区別意識は薄く、原典の精確な引用を心掛ける者は稀であった。著述家の意図や性格によって引用や紹介の仕方は多様であり、個別の検討が必要であるが、断片集はそういった問題を捨象した所に成り立っている。

今後の古代哲学研究では、断片の性格や引用の文脈・意図により注意を払う資料批判が必須となる。また、諸資料の共通性や依拠する (失われた) 元資料の性格、証言の伝承過程にも詳細な検討が必要である。DK 等の資料集から「断片」をそのまま持ち出して哲学解釈を云々する事は、最早あまりに素朴な態度と言わざるを得ない。総合的で本格的な資料研究が古代哲学研究にとって重要課題であり、文献批判・伝承史・歴史学の手法が求められる。

本論が扱う DL に関しても、82 人に及ぶ哲学者列伝の間で量・質や哲学的・歴史的価値は千差万別であり、依拠する元資料も実に多様である。DK など断片集において重要な位置を占めるにもかかわらず、DL の資料研究は現代でも不十分であり (資料的価値は低く見積もられがち)、註釈書や包括的検討が俟たれている (なお、DL のテクストは Long による OCT 版も Marcovich による最新の Teubner 版も校訂の不備が指摘されている。後者については J. Barnes による *CR* 2002 書評参照。研究には写本照合・校訂がなお必要であるが、今後の課題としたい)。

2、ディオゲネス・ラエルティオスとプロタゴラス資料

(1) プロタゴラスの資料伝承

ソフィストの第一人者として哲学史上重要なプロタゴラスには、本人の著作は伝承せず「断片」もごく僅かしかない。主要著作からの引用という意味での「断片」は、「人間尺度説」(B1) と「神不可知論」(B4) の 2 片にほぼ限られる (共に DL 所収 : 他に何らかの引用と見なされ得るのは B3, 9, 10 とシリア語での B11, 12)。DK の A「生涯と学説」には 50 程の後世の証言が収められているが、思想復元には困難が大きい。この貧困な資料状況は、2 作品と 1 概要を中心に多くの断片が残るゴルギアスとの比較で際立つ。他方で、プロタゴラスを本格的に取り上げたプラトン『プロタゴラス』『テアイテトス』は共に哲学者ソクラテスとの対比でプロタゴラスを批判する意図で執筆されており、そこでの生き生きした描写と哲学的分析は、影響力故にプロタゴラス自身の原思想をより見え難くしている。

ライデン大学と共同での「資料集」編集作業では、DK が収録した断片以外に 275 あまりの後世の証言が確認され、復元にかなり重要なものも含まれる (B4 再構成にカピッシが用いたエウセビオス証言が典型、註 13 参照)。DK は専らプロタゴラス思想への直接証言や復元を念頭に置いていたが、古代におけるプロタゴラスの

哲学的位置については、これら未収録資料が今後の研究により重要となる。

(2) ディオゲネス・ラエルティオスの資料的意義

後3世紀の哲学史家ディオゲネス・ラエルティオスによるまとまった記述は、資料が乏しいプロタゴラスの活動や思想の研究に中核的意義を担う。とりわけ、引用断片B1, 4の基本資料としての意義は大きい(B1については他にプラトンとセクストス、B4はエウセビオスが主な資料)。DLは生涯や事績について最も豊富な情報を提供し、著作リストはここにしか存在しない。雑多な証言の集積ではあるが、議論・弁論・文法といった言語への多面的な関心が紹介され、認識論、神々についての発言も含まれている。この包括的な報告は、他の著者のより限定的な諸証言と照らし合わせる事で、プロタゴラスの活動や理論復元への基盤となる。他方で、現代ではプロタゴラス思想として重視される「徳・政治」の考察、とりわけプラトン『プロタゴラス』でプロタゴラスが語る人間社会の起源に関わる証言が見られない点が特徴である。これは古代後期のプロタゴラス観に共通する傾向であり、その点でもDLは時代の見方を代表している。

(3)『哲学者列伝』における位置

DLは、イタリア派の系譜でデモクリトスの次にプロタゴラスの伝記を置いている(9巻8章, DK 80A1)。この位置付けは、プロタゴラスがデモクリトスに教わった(DL 9.50)との師弟関係に基づいており、エウセビオス『福音の準備』14.17.10 (DK 69A1)、クレメンス『雑録集』1.64 (DK 70A1)でも確認される古代の通説であった(デモクリトスとの関係は註7, 22参照)。他方で、プロタゴラスの名は全体の序論に当たる1巻1-21では言及されず、本来ヘラクレイトスら「散発的哲学者」(8.91)を扱う予定の9巻では、プロタゴラスの直後にアポロニアのディオゲネスが登場する構成上の不整合が認められる。プロタゴラスは他に「プラトン伝」3.37, 57、「デモクリトス伝」9.42、「エピクロス伝」10.8で言及され、独立の記述が与えられないゴルギアス、ヒッピアスら他のソフィストと比べ、哲学者としての扱いが突出している。フィロストラトス『ソフィスト列伝』とDLの両方に伝記を持つのは、プロタゴラス唯一人であった。

(4) 他資料との関係

DLは他の哲学者の場合と同様、プロタゴラスについても先行する概説や伝記に依拠して情報をまとめている。直接プロタゴラスの著作や一次資料にあたっている可能性は極めて低く、証言も間接的な紹介が多い。DLが依拠した元資料の推定や復元は困難ながら、諸資料との照合は、異同や依存関係を明らかにしながら証言の信憑性を確かめる資料研究の基礎となる。個別主題に関する証言は各分野(弁論術、認識論、神論)で受け継がれてきたが、プロタゴラスの人物・思想の概説という点では、同時代のフィロストラトス『ソフィスト列伝』(DK 80A2)、『プラトン古註』(A3; 通常、後6世紀頃のミレトスのヘシュキオス『人名事典』Ὀνοματολόγον に帰される)、『スーダ』「プロタゴラス」(ヘシュキオスとDLの混淆としてDKは収録せず)が、照合されるべき資料群である。19世紀には『スーダ』はヘシュキオスをそのまま用いているとされ現在でもそう見られがちであるが、プロタゴラス伝に関しては『プラトン古註』の記述との相違点も確認され、共通性や依存など両資料の関係の再検討が必要である。

3、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』9巻50-56

［テクスト］

ΠΡΩΤΑΓΟΡΑΣ

(50) Πρωταγόρας Ἀρτέμωνος ἤ, ὡς Ἀπολλόδωρος[*1] καὶ Δί‹ν›ων[(1)] ἐν Περσικῶν ε΄,[(2)*2] Μαιανδρίου[*3] Ἀβδηρίτης, καθά φησιν Ἡρακλείδης ὁ Ποντικὸς ἐν τοῖς Περὶ νόμων, ὃς καὶ Θουρίοις νόμους γράψαι φησὶν αὐτόν·[*4] ὡς δ' Εὔπολις ἐν Κόλαξιν, Τήϊος· φησὶ γάρ· "ἔνδοθι μέν ἐστι Πρωταγόρας ὁ Τήϊος."[*5]

οὗτος καὶ Πρόδικος ὁ Κεῖος λόγους ἀναγινώσκοντες ἠρανίζοντο· καὶ Πλάτων ἐν τῷ Πρωταγόρᾳ φησὶ βαρύφωνον εἶναι τὸν Πρόδικον.[*6] διήκουσε δ' ὁ Πρωταγόρας Δημοκρίτου.[*7] ἐκαλεῖτό τε Σοφία, ὥς φησι Φαβωρῖνος ἐν Παντοδαπῇ ἱστορίᾳ.[*8]

(51) καὶ πρῶτος ἔφη δύο λόγους εἶναι περὶ παντὸς πράγματος ἀντικειμένους ἀλλήλοις·[*9] οἷς καὶ συνηρώτα, πρῶτος τοῦτο πράξας.[*10] ἀλλὰ καὶ ἤρξατό που τοῦτον τὸν τρόπον· "πάντων χρημάτων μέτρον ἄνθρωπος, τῶν μὲν ὄντων ὡς ἔστιν, τῶν δὲ οὐκ ὄντων ὡς οὐκ ἔστιν."[*11] ἔλεγέ τε μηδὲν εἶναι ψυχὴν παρὰ τὰς αἰσθήσεις, καθὰ καὶ Πλάτων φησὶν ἐν Θεαιτήτῳ, καὶ πάντα εἶναι ἀληθῆ.[*12] καὶ ἀλλαχοῦ δὲ τοῦτον ἤρξατο τὸν τρόπον· "περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὔθ' ὡς εἰσὶν οὔθ' ὡς οὐκ εἰσίν·[(3)] πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντα εἰδέναι, ἥ τ' ἀδηλότης καὶ βραχὺς ὢν ὁ βίος τοῦ ἀνθρώπου."[*13]

(52) διὰ ταύτην δὲ τὴν ἀρχὴν τοῦ συγγράμματος ἐξεβλήθη πρὸς Ἀθηναίων, καὶ τὰ βιβλία αὐτοῦ κατέκαυσαν ἐν τῇ ἀγορᾷ ὑπὸ κήρυκι[(4)] ἀναλεξάμενοι παρ' ἑκάστου τῶν κεκτημένων.[*14]

οὗτος πρῶτος μισθὸν εἰσεπράξατο μνᾶς ἑκατόν·[*15] καὶ πρῶτος μέρη χρόνου διώρισε[*16] καὶ καιροῦ δύναμιν ἐξέθετο καὶ λόγων ἀγῶνας ἐποιήσατο καὶ σοφίσμα‹τα›[(5)] τοῖς πραγματολογοῦσι προσήγαγε· καὶ τὴν διάνοιαν ἀφεὶς πρὸς τοὔνομα διελέχθη καὶ τὸ νῦν ἐπιπόλαιον γένος τῶν ἐριστικῶν ἐγέννησεν·[*17] ἵνα καὶ Τίμων φησὶ περὶ αὐτοῦ· "Πρωταγόρης τ' ἐπίμ‹ε›ικτος[(6)] ἐριζέμεναι εὖ εἰδώς."[*18]

(53) οὗτος καὶ τὸ Σωκρατικὸν εἶδος τῶν λόγων πρῶτος ἐκίνησε.[*19] καὶ τὸν Ἀντισθένους λόγον τὸν πειρώμενον ἀποδεικνύειν, ὡς οὐκ ἔστιν ἀντιλέγειν, οὗτος πρῶτος διείλεκται, καθά φησι Πλάτων ἐν Εὐθυδήμῳ.[*20] καὶ πρῶτος κατέδειξε τὰς πρὸς τὰς θέσεις ἐπιχειρήσεις, ὥς φησιν Ἀρτεμίδωρος ὁ διαλεκτικὸς ἐν τῷ Πρὸς Χρύσιππον.[*21] καὶ πρῶτος τὴν καλουμένην τύλην, ἐφ' ἧς τὰ φορτία βαστάζουσιν, εὗρεν, ὥς φησιν Ἀριστοτέλης ἐν τῷ Περὶ παιδείας· φορμοφόρος γὰρ ἦν, ὡς καὶ Ἐπίκουρός πού φησι, καὶ τοῦτον τὸν τρόπον ἤρθη πρὸς Δημοκρίτου[(7)] ξύλα δεδεκὼς ὀφθείς.[*22]

διεῖλέ τε τὸν λόγον πρῶτος εἰς τέτταρα, εὐχωλήν, ἐρώτησιν, ἀπόκρισιν, ἐντολήν·

(54) (οἱ δέ, εἰς ἑπτά, διήγησιν, ἐρώτησιν, ἀπόκρισιν, ἐντολήν, ἀπαγγελίαν,[(8)] εὐχωλήν, κλῆσιν), οὓς καὶ πυθμένας εἶπε λόγων, Ἀλκιδάμας δὲ τέτταρας λόγους φησί, φάσιν, ἀπόφασιν, ἐρώτησιν, προσαγόρευσιν.[*23]

πρῶτον δὲ τῶν λόγων ἑαυτοῦ ἀνέγνω τὸν Περὶ θεῶν, οὗ τὴν ἀρχὴν ἄνω παρεθέμεθα· ἀνέγνω δ' Ἀθήνησιν ἐν τῇ Εὐριπίδου οἰκίᾳ ἤ, ὥς τινες, ἐν τῇ

Μεγακλείδου· ἄλλοι ἐν Λυκείῳ, μαθητοῦ τὴν φωνὴν αὐτῷ χρήσαντος Ἀρχαγόρου τοῦ Θεοδότου.[*24] κατηγόρησε δ' αὐτοῦ Πυθόδωρος Πολυζήλου, εἷς τῶν τετρακοσίων· Ἀριστοτέλης δ' Εὔαθλόν φησιν.[*25]

(55) ἔστι δὲ τὰ σῳζόμενα αὐτοῦ βιβλία τάδε·[*26]

Τέχνη ἐριστικῶν, Περὶ πάλης,[*27] Περὶ τῶν μαθημάτων, Περὶ πολιτείας, Περὶ φιλοτιμίας, Περὶ ἀρετῶν, Περὶ τῆς ἐν ἀρχῇ καταστάσεως, Περὶ τῶν ἐν Ἅιδου, Περὶ τῶν οὐκ ὀρθῶς τοῖς ἀνθρώποις πρασσομένων, Προστακτικός, Δίκη ὑπὲρ μισθοῦ, Ἀντιλογιῶν α′ β′.

καὶ ταῦτα μὲν αὐτῷ τὰ βιβλία. γέγραφε δὲ καὶ Πλάτων εἰς αὐτὸν διάλογον.

φησὶ δὲ Φιλόχορος πλέοντος αὐτοῦ εἰς Σικελίαν τὴν ναῦν καταποντωθῆναι· καὶ τοῦτο αἰνίττεσθαι Εὐριπίδην ἐν τῷ Ἰξίονι.[*28] ἔνιοι κατὰ τὴν ὁδὸν τελευτῆσαι αὐτόν, βιώσαντα ἔτη πρὸς τὰ ἐνενήκοντα.

(56) Ἀπολλόδωρος δέ φησιν ἑβδομήκοντα, σοφιστεῦσαι δὲ τεσσαράκοντα καὶ ἀκμάζειν κατὰ τὴν τετάρτην καὶ ὀγδοηκοστὴν ὀλυμπιάδα.[*29]

ἔστι καὶ εἰς τοῦτον ἡμῶν οὕτως ἔχον·[*30]

καὶ σεῦ Πρωταγόρη, φάτιν ἔκλυον, ὡς ἄρ' Ἀθηνέων
ἔκ ποτ' ἰὼν καθ' ὁδὸν πρέσβυς ἐὼν ἔθανες·
εἵλετο γάρ σε φυγεῖν Κέκροπος πόλις· ἀλλὰ σὺ μέν που
Παλλάδος ἄστυ φύγες, Πλουτέα δ' οὐκ ἔφυγες.

λέγεται δέ ποτε αὐτὸν ἀπαιτοῦντα τὸν μισθὸν Εὔαθλον τὸν μαθητὴν ἐκείνου εἰπόντος "ἀλλ' οὐδέπω νίκην νενίκηκα" εἰπεῖν "ἀλλ' ἐγὼ μὲν ἂν νικήσω, ὅτι ἐγὼ ἐνίκησα, λαβεῖν με δεῖ· ἐὰν δὲ σύ, ὅτι σύ."[*31]

γέγονε δὲ καὶ ἄλλος Πρωταγόρας ἀστρολόγος, εἷς ὃν καὶ Εὐφορίων ἐπικήδειον ἔγραψε· καὶ τρίτος Στωϊκὸς φιλόσοφος.

［異読］

(1) Δίων, BPFD: Δίνων, Menagius, DK, OCT, Teub.: Δείνων, Cobet, Loeb, Unt., Cap.; 古代で既に名前の綴り方が分かれている

(2) Περσικῶν ε′, Diels; Περσικῶν ἐν, P^1Q 等の写本の読みからの校訂で、現代では一般に採用されている

(3) οὔθ' ... οὔθ', BP: εἴθ' ... εἴθ', FD; 註 13 参照

(4) κήρυκι, Φ, Cobet: κήρυκα, BPFD

(5) corr. Aldobrandinus, Cobet

(6) corr. Diels

(7) 写本の読み Δημόκριτον (BPFD) に対して、Diels が Δημοκρίτου とし、以後の校訂者はそれに従っている

(8) ἀπαγγελίαν DP^2: ἐπαγγελίαν BP^1F (cf. *Suida* Π 3132); cf. εἰσαγγελίαν *Suida* Π 2958; 註 23 参照

［訳］

(50) プロタゴラスは、アルテモンの子、もしくは、アポロドロスやディノンが『ペルシア誌』5巻で言うには、マイアンドリオスの子であった。ポントスのヘラクレイデスが『法律について』で言うには、アブデラの人で、トゥリオイの人々の為に法律を起草した、とも彼は言っている。他方で、エウポリス『追従者たち』によれば、テオスの人である。曰く、「内にはテオスの人、プロタゴラスがいる」。

彼とケオスのプロディコスは、言論を読み上げて〔授業料を〕徴収していた。プラトンは『プロタゴラス』で、プロディコスは声が低いと言っている。プロタゴラスはデモクリトスの教えを受けた。その彼〔デモクリトス〕は、ファボリノスが『歴史雑録』で言うには、「知恵」と呼ばれていた。

(51) プロタゴラスは、全ての事柄について互いに対立する2つの言論がある、と主張した最初の人である。それを用いて連続した問い掛けをなしたが、これを実践した最初の人でもあった。また、彼は或る箇所で、次の仕方で〔書物を〕始めていた。「人間は万物の尺度である。あるものには、あることの。ないものには、ないことの」。彼は、プラトンも『テアイテトス』で言うように、感覚を離れては魂は何物でもない、また、全ては真である、と語っていた。また、別の箇所では、次の仕方で始めていた。「神々について私は、あるともないとも、知ることができない。知るには障害が多いから。その不明瞭さや、人間の生が短いこと」。

(52) その書き物のこの冒頭部故に、彼はアテナイ人たちから追放処分にあった。そして、彼ら〔アテナイ人〕は彼の書物を公共広場で焼却した。伝達官によって各所有者から回収して。

彼は100ムナの報酬を要求した最初の人であり、時間の部分を区別し、時宜の効力を解説し、言論の闘争を作り出し、訴訟する者に詭弁を導入した最初の人である。また、意味内容をさておいて言葉上だけで議論を交わし、現在表に出ている「争論家」の種族を生み出した。それで、ティモンも彼について、こう言っている。「プロタゴラス、混ぜ合わせる人、争論に長けた者」。

(53) 彼は、ソクラテス的種類の言論を最初に展開した。また、プラトンが『エウテュデモス』で言うには、「反論する事は出来ない」と証明しようとするアンティステネスの言論は、彼が最初に議論した。また、弁証家アルテミドロスが『クリュシッポス論駁』で言うには、彼が最初に、一般論題に対する攻撃法を示した。また、アリストテレスが『教育について』で言うように、その上に荷物を担ぐ「肩当て」と呼ばれるものを最初に発明したのも、彼である。というのは、エピクロスも或る箇所で言っているように、彼〔プロタゴラス〕は荷物持ちであったから。そのやり方で木材をくくり付けている見られて、デモクリトスと縁が出来たのだ。

彼は、言論を4つの種類に区別した最初の人である。即ち、祈願、質問、応答、命令であり、

(54) (他方で、別の人々は7つに分けている。即ち、叙述、質問、応答、命令、報告、祈願、呼出)、彼〔プロタゴラス〕はこれらを言論の基本型と呼んだ。他方で、アルキダマスは4種の言論を主張しているが、それは肯定、否定、質問、呼掛である。

自分の言論で最初に読み上げたのは『神々について』で、その冒頭部を私たち

は上で引用した。彼はそれをアテナイで、エウリピデスの家、或いは、或る人々によれば、メガクレイデスの家で読んだ。別の人々は、リュケイオンで、彼の弟子であるテオドトスの子アルカゴラスが彼に代わって声を出した〔代読した〕としている。彼を告発したのは、ポリュゼロスの子ピュトドロスで、400人〔政権〕の一人であった。だが、アリストテレスはエウアトロスだと言っている。

(55) 現存する彼の書物は、次のものである。

『争論の技術』『レスリングについて』『数学について』『国制について』『名誉欲について』『諸徳について』『原初の状態について』『冥府の事について』『人々に正しくない行ないを為す者について』『教訓』『報酬の為の法廷弁論』『反論の技術』全2巻

これが彼の書物である。プラトンも彼について対話篇を書いている。

フィロコロスが言うには、彼はシケリアに向けて航海している時に船が沈没したが、それをエウリピデスは『イクシオン』で仄めかした。或る人々は、彼は道中で死んだが、90歳近くまで生きていたとしている。

(56) アポロドロスは〔死没を〕70歳とし、40年間ソフィストとして活動し、84オリンピックの時〔前444-441年〕に盛年を迎えたと言っている。

彼には、私たちが作った次のようなエピグラムもある。

「プロタゴラスよ、あなたについて噂を聞いた。アテナイからの道中、年老いてあなたは死んだ。ケクロプスのポリス〔アテナイ〕はあなたが追放されることを選んだからだ。しかしあなたは、パラス〔アテネ女神〕の街は逃れたが、プルート〔冥府の主〕を逃れはしなかった。」

彼が或る時、弟子のエウアトロスに授業料を請求した時、彼がこう答えたと伝えられる。「いや、まだ裁判で勝ってはいませんから」。すると、彼はこう言った。「いや、もし私が裁判で勝ったら、私が勝ったという理由で私は授業料を得るべきだ。だが、もし君が勝ったら、君た勝ったという理由でだ」。

別に、天文学者プロタゴラスもおり、彼に対してはエウフォリオンも追悼歌を書いている。第三に、ストア派の哲学者にもプロタゴラスがいる。

［註解］

【50節】

1) アポロドロスは前2世紀の年代誌家。56節での言及(註29参照)と同一出典か。

2) ディノンは前4-3世紀にペルシアに関する書物を著した人物。フィロストラトス「プロタゴラス伝」(DK 80A2)はディノンの名に言及しないものの、プロタゴラスの父とペルシア王の関係、少年プロタゴラスが「マゴスたち」に習った事を記しており、ディノンへの依拠が推定される。逆に、DLがペルシアやマゴスに関わる逸話に全く触れていないのは不思議で(デモクリトスとマゴスの関係と比較；DL 9.34)、ここでの言及はアポロドロスからの孫引きかもしれない。*FGrH* 690に30ほど収録されたディノンの引用断片は、大半がアテナイオスとプルタルコスのもので、DLではこの箇所(fr. 6)と1.8 (fr. 5)のみ。1.8ではディノン『歴史』5巻が言及され(同一書物の別名か：ディールスによる「5巻」という校訂(異読2)も参照)、プラトンの弟子シラクサのヘルモドロスとの一致も指摘されている。

3) 父親の名は5つの資料で伝承されているが、混乱がある。
＊ DL: Ἀρτέμωνος; 出典不明、または、Μαιανδρίου (PF), Μεανδρίου (BD); アポロドロスとディノンの証言
＊フィロストラトス：写本では Μαίανδρος だが、プロタゴラスの断片集では DL に合わせて Μαιάνδριος に校訂される傾向にある（ディールスが校訂、Unt., Cap. が従う）
＊『プラトン古註』ad *Rep.* 600c (DK 80A3): Ἀρτέμωνος
＊『スーダ』Πρωταγόρας (Π 2958): Ἀρτέμωνος ἢ καὶ Μαιανδρίδου ἢ καὶ Νεανδρίου; ἢ Νεανδρίδου V, ἢ Νεανδρίου ABE, om. Flach, Cap.（写本情報は Flach, *Hesychii Milesii Onomatologi*, 1882 による）
＊エピファニオス『異教徒論駁』3.2.9.16 (Cap. A23, *DG* 591.1): Μενάνδρου

まず Ἀρτέμων という名が3つの資料で報告される。『プラトン古註』は単独で記している事から、DL と『スーダ』は『プラトン古註』と同系統の伝承を用いながら、それに別の情報を足していると推定される (DL では一方にしか出典言及がない)。この点から、『プラトン古註』が恐らく DL に直接依拠していない事が推定される。

他方で、フィロストラトスは DL が言及するディノンからより多くの情報を含んでおり、その元資料への関わりが強い（前註参照）。それ故、Μαιάνδριος という DL の綴りがディノンより寧ろアポロドロスに由来する可能性も推測され、DL に合わせてフィロストラトスを校訂する DK の処理には疑問が残る。

通常ヘシュキオスから取られたと見なされる『スーダ』の記事も、この点では他の情報を加えた、より混乱した情報となっている (Νεάνδριος の名は、独立の伝承というより、綴りの間違いから生じたものであろう)。エピファニオスの記事は神々の存在否定の文脈にある事から、フィロストラトスと同様ディノンに由来する東方マゴスとの交わりの逸話を意識し、それを不敬神と結び付ける解釈が前提されているかもしれない。だが、綴りの違いもあり、エピファニオスがフィロストラトスに直接依拠している可能性は低い。何故2系統の父親名が伝承されているかは（種々の推測があるが）不明。

4) Fr.150 Wehrli. 前4世紀半ばアカデメイアの主要メンバーであったポントスのヘラクレイデスのこの著作は、DL 5.87 で倫理学の対話篇として言及されている『法律について』全1巻 Νόμων α′ であろう。ヘラクレイデスにはまた『弁論について、或いは、プロタゴラス』Περὶ τοῦ ῥητορεύειν ἢ Πρωταγόρας という弁論術関係の著作タイトルも見られ (DL 5.88; fr.33 Wehrli)、プラトン周辺でプロタゴラス弁論術への関心が高かった様が窺われる（但し、ヴェーリ (69) のように、批判の為と考える根拠はない）。

トゥリオイは、前444年にペリクレスの発案で南イタリアに建国された植民市。プロタゴラスがその法律を作ったとすると、彼の政治哲学の実践例として重要である。但し、証言はこの箇所（ヘラクレイデスに依拠）にしか見られない。トゥリオイの建国年は歴史の主な出来事の規準に用いられ、55節で紹介されるプロタゴラスの盛年（アクメー）もこの時に設定されている（註29参照）。ペリクレスとの親交は有名でプルタルコス『ペリクレス伝』36 (DK 80A10)、擬プルタルコス『アポロニウス宛弔意書簡』118E (B9) 等に逸話が伝えらるが、トゥリオイ建国時に既に深

い交流と信頼があったとしたら、プロタゴラスのアテナイでの活動開始期はそれよりしばらく前に遡るはずである。

5) Fr.157 *PCG* の前半部。エウポリスはアリストファネスと同時代の古喜劇詩人で、『追従者たち』Κόλακες は前 421 年に一等賞を取っている。プラトン『プロタゴラス』やクセノフォン『饗宴』でホストを勤める富豪カリアスの邸宅に集う知識人たちを揶揄した喜劇であろう (I. C. Storey, *Eupolis*, 2003, 179-197 参照)。エウスタティオスは『ホメロス『オデュッセイア』註解』(1.1547) で fr.157 *PCG* 後半部を紹介するにあたり「自然学者 φυσικόν プロタゴラス」と呼び、エウポリスが劇中でプロタゴラスに多くの自然学的知見を語らせていた事を推察させる (DK 80A11; cf. fr.158 *PCG*)。カリアスとソフィストの関係はプラトン『ソクラテスの弁明』20a-c で語られ、クセノフォン『饗宴』1.5 ではプロタゴラスにも言及される (DK 未収録証言)。アイスキネスにも『カリアス』という対話篇があり、アナクサゴラスやプロディコスを登場させていたが、その断片 (*SSR* VI A73) で「アナクサゴラス」の代わりに「プロタゴラス」と読む Cobet, *Prosopographia Xenophontea*, 1836, 61 の提案 (Krauss の Teubner, 1911 が採用 ; cf. DK 80C5) には根拠がない。

なお、プロタゴラスをテオス出身とするこの同時代証言は、ビザンティンのステファノス『地理学事典』「テオス」にもあり、古代で知られていた。アブデラは元々小アジアのイオニア都市テオスからの植民市であり、ペルシアの占領時 (前 494 年頃) にもテオスの人々が移民している。裕福であったとされるプロタゴラスの父や祖先が、テオスの出身であったとして不思議はない。他方で、喜劇詩人の駄洒落の可能性も考慮すべき。Τήϊος は θεῖος「神の如き」という類音語を連想させ、断片後半の ἁλιτήριος と合わせて、プロタゴラスの不敬神が揶揄されているのかもしれない。

6) プラトン『プロタゴラス』は前 433-432 年カリアス邸に設定された対話で、「声の低さ故に」(διὰ τὴν βαρύτητα τῆς φωνῆς, 316a) というソクラテスの描写がある。ソフィスト・プロディコスに DL は独立の報告を与えてはいないが、『プラトン古註』(DK 80A3) には彼がプロタゴラスの弟子であったとの記述がある。プロディコスは『ヘラクレスの選択』という書き物を各地で読み上げて好評を博していたとされ (クセノフォン『ソクラテスの想い出』2.1 が収録)、プロタゴラスも同様に自身の書物を講義や講演で読み上げていたのであろう (『神々について』は 54 節参照)。フィロストラトスによれば、ゴルギアスはこの手法に対抗して「即興演説」を始めたという。λόγους ἀναγινώσκοντες という表現には、その対比が意識されている可能性もある。

7) 同郷の思想家デモクリトスとの師弟関係は、DL 9.42, 10.8 の他、アプレイウス『金言集』18 (DK 80A4)、フィロストラトス『ソフィスト列伝』1.10 (A2)、『プラトン古註』(A3) で繰り返されており、ゲリウス『アッティカの夜』5.3 のように古代の代表的逸話となっていた (由来は註 22 参照)。しかし、現代の年代考察でデモクリトスはプロタゴラスより一世代若い前 465 年頃の生まれとされ、彼に教えたという事はありそうにない。他方で『スーダ』「プロディコス」は、プロディコスをデモクリトスやゴルギアスの同時代でプロタゴラスの弟子と報告しており (DK 84A1)、このようなほぼ正しい伝承も並行して存在していた事が判る。

8) ἐκαλεῖτο は文法的には前文の主語「プロタゴラス」を受けるのが自然なため、DL の勘違いとの解釈もある (J. Mejer, *Diogenes Laertius and his Hellenistic Backgrounds*, 1978, 25)。しかし、デモクリトスが「知恵」Σοφία と呼ばれていた事は『スーダ』(DK 68A2)、クレメンス (A18) で知られ、他方、プロタゴラスは「言論」Λόγος と綽名されていた事が『プラトン古註』(DK 80A3) から確認される。アエリアノス『ギリシア奇談集』4.20 には、「アブデラの人々は、デモクリトスを「知恵の愛求」Φιλοσοφία、プロタゴラスを「言論」Λόγος と呼んでいた」とあり、(前者の呼称はやや異なるものの) 両者が対で綽名を与えられていた可能性が窺われる。もしこれらに共通する資料 (ファボリノス ?) が同様に対の綽名を提示していたとすると、DL は続けて「言論」の話題を取り上げる事から、ここでのデモクリトスの綽名への言及は、不完全な紹介ではあっても、あながち無意味な挿入とは言えない。

【51 節】

9) この主張は、肯定と否定、賛成と反対、(裁判であれば) 告発と弁護のいずれの議論も構築できる事を意味する。プロタゴラスの代表手法「反論術」ἀντιλογική がこれに当たり、ソフィスト弁論術の教育内容をなす。プロタゴラスの相対主義と理論的に連関している可能性もあり (だが必然ではない)、DL が直後に「人間尺度説」を引用する事から、一連の教説と捉えられていた可能性もある。「全ての事柄について互いに対立する 2 つの言論がある」という主張への明示的言及は、当該箇所の他、セネカ『書簡』88.43 とクレメンス『雑録集』6.65 (共に DK 80A20) と紀元後に限られる事から、プロタゴラス自身に帰せられるか否かに疑問もある。しかし、ステファノス『地理学事典』(A21) のエウドクソス証言 (前 4 世紀半ば、fr. 307 Lasserre) にはこれに当たる主張が含まれ、プラトン『ソフィスト』232b-233c で彼の名と共に論じられる ἀντιλογική、更にアリストファネス『雲』112-114 (C2) での揶揄から、プロタゴラスに遡る事はほぼ間違いない (アリストテレス『弁論術』2.24, 1402a23 (A21) 等に見られる「弱論を強弁する」とは、類似の表現ながら内容が異なる事にも注意)。

ここから始まるプロタゴラスの業績紹介には、「最初の」πρῶτος という表現が繰り返し用いられる (51-54 節に 10 回 ; ここが同一資料からの一連の引用部を成すとの推定も可能)。この表現は DL だけでなくフィロストラトス (2 回)、『プラトン古註』(1 回)、『スーダ』(3 回) にも登場する事から、プロタゴラスを多くの事柄の創始者とする (その中には「最初のソフィスト」も含まれる) 伝承が既に共通資料 (群) にあったと考えられる。ちなみに、プルタルコスの著作リスト (Lamprias Catalogue) には『プロタゴラスの最初の物事について』Πρωταγόρου περὶ τῶν πρώτων という標題が含まれている (nr.141)。プロタゴラス自身の著作が紛れ込んだものではないとして、プルタルコスか誰かがプロタゴラスに関する「最初の物事」を集めた著作だったかもしれない。

10) 相対立する言論の実践が「問い掛け」によるとされる事から、ディールスは「推論形式の対話」と推定している。これが 53 節で言及される「ソクラテス的種類の言論」に対応する可能性もある (註 19 参照)。肯定・否定両面で言論を組み立てる訓練は、アカデメイアでのディアレクティケーの方法につながる。

11) プラトン『テアイテトス』161c によれば『真理』Ἀλήθεια、セクストス『諸学

者論駁』7.60によれば『打倒論法』Καταβάλλοντες と題される著作の冒頭。DKで断片B1とされるセクストスの引用には ἐστὶν ἄνθρωπος とあるが、DLでは ἐστὶν が落ちている。『テアイテトス』ではソクラテスが「彼は、何らかこう言っている」と引用する際に、文章を間接引用の対格＋不定詞に置き換えている。DLも著作名に言及せず「或る箇所で」と導入しており、原著作を見ての逐語的引用ではなく間接的引用であろう。この著作は『神々について』と同様、DLの時代には既に失われていた可能性が高い。

12) プラトン『テアイテトス』に言及したこの学説紹介は、前半・後半共に非常に不正確(または不親切)である。『テアイテトス』第1部ではプロタゴラスが感覚を魂の主体と捉えているという趣旨で批判が加えられるが、「感覚を離れては魂は何物でもない」という命題はプラトンのパラフレイズにはない。また、プロタゴラスの「魂」観についてテルトゥリアヌス(A18)以外に証言はない。「全ては真である」という命題も「全ての現れ・感覚は真である」といった通常の要約の正確ささえ欠いている。この箇所は、DLが典拠に言及する学説紹介の信頼性に疑問を惹起する。

13)『神々について』の冒頭は、エウセビオスとテオドレトスの報告から「あるともないとも、どのような姿形であるかも」οὔθ' ὡς εἰσὶν οὔθ' ὡς οὐκ εἰσὶν οὔθ' ὁποῖοί τινες ἰδέαν と推定され、DKではB4断片として復元されている。しかし、DLに第3句 οὔθ' ὁποῖοί τινες ἰδέαν は含まれておらず、寧ろ直前に引用された『真理』冒頭の対句表現 τῶν μὲν ὄντων ὡς ἔστιν, τῶν δὲ οὐκ ὄντων ὡς οὐκ ἔστιν により緊密に対応するように見える。この第3句欠如の問題と関連するのは、DLのFD写本では εἴθ' ... εἴθ'「あるか、ないか」と読まれる事で(BP写本は οὔθ' ... οὔθ' となっており、エウセビオスの引用と合わせて一般にこちらが採用)、この読みは第2句までを引用する『プラトン古註』の1写本(εἴτε ... εἴτε, Par.2622)やフィロストラトスのパラフレイズにも見られるが、第3句が入る場合には内容上不適切になる。

カピッシ101-102は、エウセビオス『福音の準備』14.19.10 (Cap. B7; DKは収録せず)が典拠とするアリストクレスへの信頼性からDKの復元に反対し、独自の「断片」を与えている。エウセビオスは πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντά με ἕκαστον τούτον εἰδέναι と引用しており、セクストス『諸学者論駁』9.56 (A12)が不正確な仕方で引用する πολλὰ γάρ ἐστι τὰ κωλύοντά με の最終部にも相応する。カピッシはDLが μὲ ἕκαστον τούτον を省略したと考え、更に ἡ τ' ἀδηλότης 以下の部分はDLにしかない事から、付加説明として断片から外している。エウセビオスが含みDLが落としている οὔθ' ὁποῖοί τινες ἰδέαν の句を断片に含めるのであれば(キケロ、フィロデモス、テオドレトスらの言及から確認; Cap. A23参照)、その続きも合わせてエウセビオス(アリストクレス)を採用するのには一貫性がある。DLが不正確な引用から(B1引用の際の ἐστὶν 欠落も参照)いくつかの語句を省略している可能性は高いが、他方で、カピッシのように接続詞 τε で繋がれた部分を断片から排除する理由も認められない。従って、DLでの欠落を補って原文復元を試みると次のようになる：

περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὔθ' ὡς εἰσὶν οὔθ' ὡς οὐκ εἰσὶν ‹οὔθ' ὁποῖοί τινες ἰδέαν›· πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντά ‹με ἕκαστον τούτον› εἰδέναι, ἥ τ' ἀδηλότης καὶ βραχὺς ὢν ὁ βίος τοῦ ἀνθρώπου.

「神々について私は、あるともないとも、また姿がどうであるかも、知ることがで

きない。私がこの各々を知るには障害が多いから。その不明瞭さや、人間の生が短いこと」

なお、ここで「不明瞭さ」とは「その事柄が人間にとって不明瞭」の意であり、従って神に関する人間の認識能力の限界を指示する (J. Mansfeld, *Hermes* 44, 1981 所収論文参照)。

【52 節】

14)『神々について』に絡む不敬神裁判とアテナイ追放、焚書については、古代に多くの言及がある。だが、最も古いものがセクストスが引用するティモンの証言 (前 3 世紀、註 18 参照) で、詳細には疑問が多い (J. Burnet, *Greek Philosophy*, 111-112 は裁判そのものを否定)。例えば、アテナイでプロタゴラスが最初に読み上げた言論が『神々について』であると 54 節で述べられるが、それがすぐに追放や焚書に結び付いたとは考え難い。プロタゴラスのアテナイでの活動は或る程度の長さにわたり、数度の訪問も想定されるからである (裁判については註 25, 28 も参照)。焚書が実際に行なわれたのか、その規模についても疑問が投げ掛けられているが、パピルスに書かれた書物が一時的にせよ組織的に破壊されたとしたら、プロタゴラスの著作が後世まで伝えられ難くなった事情の説明になるかもしれない。『神々について』『真理』という二つの著書は、共に冒頭箇所以外は古代に引用も言及も残っていない。

15) 授業料を取って教育する職業性はソフィストである規準で、プラトン『プロタゴラス』328b, 349a によればプロタゴラスを嚆矢とする。フィロストラトスも「報酬を取って議論を交わすことを最初に見出し、それをギリシア人の間に最初に広めた」という同様の証言をしている。

16) C. P. Gunning, *De Sophistis Graeciae Praeceptoribus*, 1915, 50, 112-114 は DL の文脈から「時宜」に適った弁論という意味で「講義時間の区分」の意味に解し、DK はその提案に従っている。だが、他に証言はないものの、言論の 4 分類・名辞の性区別と並ぶ「動詞の時制区別」とする解釈もある (Brunschwig 等)。

17) プラトン『エウテュデモス』286c を典拠として、プロタゴラスはエウテュデモスら「争論家」ἐριστικός 型ソフィストの起源と目されていた (註 20 参照)。現存著作に『争論の技術』(55 節) という名も挙げられているが、標題は後世のものであろう。

18) 懐疑論者ティモンは風刺詩『シロイ』で多くの哲学者を揶揄したが、プロタゴラスについては、不敬神の言説と裁判に触れた断片 (fr.5 *PPF*; セクストス『諸学者論駁』9.56 (A12) 所収) と本断片 (fr.47 *PPF*) が伝わっている。ἐπίμεικτος は「社交的な」とも訳されてきたが、争論術に関して反対の議論、或いは真偽を「いっしょくたにする」の意であろう。

【53 節】

19) プロタゴラスを「ソクラテス的種類の言論」(問答形式の対話?) の創始者とするのは奇妙にも見える。後に「ソクラテス的」と呼ばれる手法を最初に実践したと文字通りに解し、直後に言及されるソクラテスの徒アンティステネスの言論との繋がりを見る解釈もあるが (K. Reich, *Diogenes Laertius*, PhB., 1967, 348)、アリストファネス『雲』の「ソクラテス」の議論が実際にはプロタゴラスによって用いられていた事を指すとの理解もある (C. L. Kayser, *Philostratus, VS*, 1838, 201)。

20) プラトン『エウテュデモス』286c では、ディオニュソドロスが提出したこの詭弁に対して、ソクラテスが「プロタゴラスの回りの連中や、更に昔の人々がしばしば用いていた」と述べる。従って、『エウテュデモス』はその言論を明瞭にプロタゴラスに帰する証言とは言い難く、アンティステネスに結び付けてもいない。他方で、イソクラテス『ヘレネ』1-2 (DK 未収録) では、アンティステネスの「反論・虚偽不可能論」がプロタゴラスらソフィストの詭弁と並べて論じられ、両者の関係が示唆されている。

21)「弁証家」διαλεκτικός という呼称からメガラ派との推定もなされるが、アルテミドロスについてこれ以外に証言はない。「一般論題 θέσεις に対する攻撃法」とは後世の弁論術用語での記述であるが、キケロやクインティリアヌスの弁論術著作での言及から (B6)、弁論術の歴史に組み込まれていた事が判る。

22) デモクリトスが「荷物持ち」であったプロタゴラスの才能を見出し秘書として教育したという逸話は DL 10.8 でも触れられるが、元来エピクロスの書簡『職業について』Περὶ ἐπιτηδευμάτων で述べられていた事が、アテナイオス『食卓の賢人たち』8.354 で内容と共に紹介されている (DK 68A9, fr.172 Usener)。エピクロスがその書簡で多くの哲学者を攻撃したとする DL 10.8 への 20 世紀の主要解釈は、D. Sedley, *Cahiers de Philologie* 1, 1977 所収論文が詳細に批判している。10.8 での批判的文言の列挙が (セドリーが推定するように) エピクロスの強力な批判者ティモクラテスに由来するとして、9.53 ではそれより広い情報が与えられている事から、こちらはアテナイオスと同様、エピクロス書簡そのものかそれに直接依拠した資料からの引用と推測される。

木材のくくり方の器用さが認められ学問を教授されたという逸話は、プロタゴラスのソフィスト業の原点をデモクリトスの教育に帰する栄誉にも見える。二人の年代関係の誤りに加えて、プロタゴラスの父がペルシア王を饗応したという (フィロストラトス；恐らくディノン由来) 裕福な出自とも矛盾し、でっち上げと考えて差し支えない。「肩当て」発明という技術・実践面での業績 (アリストテレス証言を信用するとして) が逸話成立に寄与し、後世あたかも史実のように伝わったのであろう。

【54 節】

23) プロタゴラスの主要な関心が言語 λόγος に向けられ、とりわけ名辞の性を区別した事は有名であった (A27, 28 のアリストテレス証言参照)。「祈願、質問、応答、命令」という言論の 4 分類は、希求法、平叙法、命令法という文法的区別に当たるとの解釈もあるが、プロタゴラスによるホメロス批判との対応から (アリストテレス『詩学』19.1456b15 (A29))、語り方をめぐる正名論 ὀρθοέπεια の文脈で理解されるべきであろう。「意味内容 διάνοιαν をさておいて言葉上 ὄνομα だけで議論を交わし」(52 節) という否定的評価も参照。この名辞の性と語型の対応へのこだわりがアリストファネス『雲』で揶揄されたと推定されている (C3)。

言論分類をめぐるここでの脱線的言及は、『スーダ』Πρωτάγορας, Πυθμήν 両項目にもほぼ同様の言い方で含まれ (但し、ἐπαγγελίαν / εἰσαγγελίαν；異読 (8) 参照)、他方で『プラトン古註』には含まれない事から、DL と『スーダ』が『プラトン古註』とは異なる共通資料を用いている事が推定される。7 分類への言及は、「一部の人々

によれば」(内山; cf. Guthrie, *Sophists*, 1971 (1969), 220, Kerferd, *Sophistic Movement*, 1981, 78) といった訳をつけてプロタゴラス説の別伝に解する研究者もいるが、οἱ δέ に φασὶν αὐτὸν διελεῖν を補わなければならず、文法的には不自然 (οἱ δὲ διεῖλον という理解がはるかに自然)。とりわけ『スーダ』Πρωταγόρας の項目では「彼〔プロタゴラス〕の後で、他の人々はこれらを7つに区別した」と明瞭に語られており (Πυθμήν の項目も同様)、別の人々の分類が元資料から紛れ込んだのであろう。アルキダマスは前5世紀末〜4世紀前半に活躍したソフィスト・弁論家だが、プロタゴラスとの直接の関係は伝えられていない (Radermacher, *Artium Scriptores*, B22, fr.9; 納富『ソフィストとは誰か?』8章参照)。

24)『神々について』を最初に読み上げた状況をめぐる諸説は、不敬神への古代の関心の高さを窺わせるが、史実かは疑問 (註14参照)。

25) 不敬神裁判への話の繋がりは元資料の文脈によるものであろう。前411年に起こった400人寡頭政権の一人ピュトドロスを告発者とするこの報告から、必ずしも不敬神裁判を400人政権中の出来事 (ヤコービ) と解する必要はない。エウアトロスは「報酬裁判」の逸話 (56節) で知られる悪名高い訴訟好きの弟子。アリストテレスの証言は「アリストテレス断片集」では失われた『ソフィスト』に帰されているが (Fr.57 Rose[2], fr.3 Ross)、特に根拠はない。

【55節】

26) この著作リストに、DLが既に引用している主著『真理』『神々について』が含まれていない事から、メナギウス以来、DK, Loeb, OCT, Unt. は欠落を想定している (Teub., Cap. には欠落の指示なし)。リスト中の著作が『真理』や『神々について』の別名、或いは一部をなすといった様々な推定が提案されているが (cf. Guthrie, op.cit., 264)、根拠は薄い。しかし、ここでの「現存する書物」τὰ σῳζόμενα βιβλία という表現はDLの時代まで伝承されている著作を指すと解され、欠落の想定は必要ない。DLでは他の哲学者の著作リストでこの表現は用いられておらず、「次の書き物が彼に帰される」φέρεται αὐτοῦ βιβλία (συγγράμματα) τάδε といった紹介の仕方が一般的 (cf. 2.83, 124, 125, 5.59, 86, 6.15, 80)。

27)『レスリングについて』という標題は、プラトン『ソフィスト』232d-e での揶揄的な言及に基づいた後世の創作とも推測されている。しかし、もし前註の推定が正しければ、真作か否かはともかく、この標題の書物が後世に伝わっていた事になる。それがプロタゴラスの書いたものである可能性も否定はできない。

28) フィロコロスは前4世紀後半 ~3世紀前半に『アッティス』をまとめた重要な歴史家で、アテナイの神官。ヤコービはこの証言を彼の著作『エウリピデスについて』の断片と位置づけ、歴史書の記述とは看做していない (fr.217 *FGrH* 328)。この証言はティモン『シロイ』断片 (fr.5 *PPF*; 註18参照) と並んで、プロタゴラスの追放に関する最も古い証言とも見なされてきた。後世の言い伝えでは、プロタゴラスは神を冒涜したという咎でアテナイから追放された後、シチリアへの逃避の途上で (バチに当って) 海難で死亡した事になっている。しかし、このフィロコロス報告からプロタゴラスの追放と遭難との時間関係、まして因果関係は明らかではなく、アテナイ追放後しばらくは元来縁の深かったシチリア辺りで活動していた可能性も考えられる (フィロストラトス「プロタゴラス伝」はそれを示唆)。

エウリピデスの失われた悲劇『イクシオン』は不敬神を題材にしていたと考えられ、そこでプロタゴラスの最期が仄めかされた事もあり得なくはないが、単なる推測か根拠に基づく言明かは不明。エウリピデスでは前 406 年上演の『バッカイ』199-203 がプロタゴラスへの揶揄と現代では推定されている (DK 80C4)。

【56 節】

29) アポロドロス (註 1 参照) はプラトン『メノン』91e (A8) の証言に基づき、プロタゴラスの生涯を 70 年とし、そのうちソフィストとしての活動を 40 年と見ている。更に、恐らくヘラクレイデスの報告するトゥリオイ建国 (前 444 年) への関与に盛年 (アクメー) を置く事で (オリンピック年を使用 ; エウセビオス『年代記』(A4) も同様)、プロタゴラスの生没年を算出している。この前提では前 484/481 ～ 414/411 年という計算になるが、ペルシア王クセルクセスの侵攻時に少年でマゴスに教わったという伝承 (ディノン ?) には前 490 年以前の生まれが整合的で、他方でアテナイ追放と死亡を前 420 年頃に遡らせる論者も多い。決定は困難であるが、私は前 490 年頃の生まれで前 415/411 年頃まで生きたと推定し、プラトンによる「70 歳」を概数と取る。

90 歳近く生きたという別伝は『プラトン古註』(A3) も報告している (そこでは 70 歳説は言及されず)。註 3, 8 で確認したように、DL は『プラトン古註』との共通資料に独自の情報 (50 節と本節ではアポロドロス) を付加している。数字の書き誤りではないかとの推測 (ヤコービ) もあるが、両資料の関係 (共通資料に由来しながら、独立) を考えると、この年代証言も一定の考慮に値する。

30) DL は多くの哲学者に自作の詩を献呈している (43 人に 49 編 ; Loeb vol.I の Long, Introduction, xvi 参照)。それらは 2 巻から成る『エピグラム集』からの引用と考えられる (cf. DL 1.39)。

31) プロタゴラスは裁判での勝利を約束して弁論術を教授したが、エウアトロスが報酬を支払わなかったことから生じた法廷論争。この逸話は、ゲリウス『アッティカの夜』5.10、アプレイウス『金言集』18.18-29 (cf. A4) でより完全な形で紹介されている (シュリアノス『ヘルモゲネス『スタシス論』註解』42 Rabe も参照)。即ち、エウアトロスはプロタゴラスの議論を逆用して argumentum retorsit、自分が裁判に勝っても負けても報酬を支払う必要はないと論じた。ソフィスト的議論を学んだ者がそれを逆用する詭弁 (ἀντιστρέφοντα, reciproca) は、哲学的には「逆転」περιτροπή という論点に対応する (「全ては真である」を含意する「人間尺度論」には、デモクリトス (DK68 A114) 以来、セクストス『諸学者論駁』7.389 (DK 80A15) やアリストテレス註釈家が繰り返し「逆転」、即ち、自己論駁という批判を加えている)。他方で、ソフィストの報酬を巡る係争は、プラトン『プロタゴラス』328b (A6) が表明する金額の任意性に由来するものかもしれない。金銭を要求する教育は古典期にはいかがわしい営みと看做されており、その悪評が争論の不道徳性と結び付いて成立した逸話であろう。

［テクスト・註・翻訳：年代順、括弧内は略号］

Diels, H. & Kranz, W. (DK), *Die Fragmente der Vorsokratiker* II, 6. Aufl. 1952, Weidmann, Dublin/Zürich (1. Aufl. 1903).

Hicks, R. D. (Loeb), *Diogenes Laertius, Lives of Eminent Philosophers* II, 1925, Loeb Classical Library, Cambridge Mass.

Untersteiner, M. (Unt), *Sofisti, testimonianze e frammenti I: Protagora e Seniade*, introduzione, traduzione e commento, 1ª ed. 1949, 2ª ed. 1961, La Nuova Italia, Firenze.

Capizzi, A. (Cap), *Protagora, le testimonianze e i frammenti*, edizione riveduta e ampliata con uno studio su la vita, le opere, il pensiero e la fortuna, 1955, G. C. Santoni, Firenze.

Long, H. S. (OCT), *Diogenis Laertii Vitae Philosophorum* II, 1964, Oxford Classical Texts, Oxford.

加来彰俊訳、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』下、岩波文庫、1994年.

内山勝利訳、「プロタゴラス」『ソクラテス以前哲学者断片集』V、岩波書店、1997年.

Marcovich, M. (Teub), *Diogenes Laertius, Vitae Philosophorum* I, 1999, Teubner, Leipzig.

Brunschwig, J. *Diogène Laërce, Vies et doctrines des philosophes illustres*, M. O. Goulet-Cazé et al., 1999, Librairie Générale Française, Paris.

Reale, G. et. al, *Diogene Laerzio, Vite e dottrine dei più celebri filosofi*, testo greco a fronte, 2005, Il Pensiero occidentale, Milano.

(慶応義塾大学)